

NATO のウクライナ兵器支援の悪夢

スコット・リッター（元米軍海兵隊情報員）著、脇浜義明訳

出典：Consortium News, 2023年1月25日 *脚注はすべて訳注。

西側諸国が最近承認したキエフへのさらなる軍事支援は、核の悪夢のリスクを伴い、ウクライナの期待を裏切り、ベルリンの著名なソ連戦争記念館に祀られている第二次世界大戦の歴史を反故にするものである。

火曜日、ホワイトハウスはウクライナに約 30 台の M1 エイブラムス戦車を送ることを決定し、これはキエフに 14 台のレオパード 2 戦車を送ることを決定したドイツへの政治的援護射撃と見られる。

1945年5月2日の早朝、ソビエト第8親衛軍司令官ワシーリー・チュイコフはドイツ軍ベルリン駐屯部隊から降伏を受領した。その2日前にソビエト第5突撃軍の一部である第150ライフル師団の兵士たちがドイツ国会議事堂の上に赤軍の旗を掲げて勝利を示した。赤軍の旗が上がった1時間後、ヒトラーと愛人のエヴァ・ブラウンが総統地下壕の部屋で自殺した。

チュイコフはスターリングラードの英雄である。ナチ軍の猛攻撃からスターリングラードを守って勝利した彼の部隊第62軍は、その勝利で第8親衛軍と改名された。その部隊を指揮してナチ・ドイツの首都の中心部に侵攻、ナチのアジトがあるベルリンのティーアガルテン地区でナチの粘り強い抵抗を粉砕した。そこでドイツの降伏を受領してそれ以上の兵士の犠牲を食い止めた決断と勇気が称えられた。

1945年、ソ連軍は彼の業績とソ連兵士が払った大きい犠牲を記念する記念碑をティーアガルテンに落成した。アドルフ・ヒトラーの新帝国議事堂跡から剥がした赤大理石と花崗岩で作られたこのモニュメントは、赤軍の大砲と T-34 戦車を挟んで、6本の軸が結合した凹状の列柱で、中央塔から勝利した赤軍兵士の巨大ブロンズ像が立って監視している。

1945年からロシア軍がベルリンから引き払った1993年まで、ソ連の衛兵が記念碑を警護していたが、その後ベルリンの壁が崩壊し、1990年のドイツ統一条約の中で東西ドイツが同意した条件に従って、記念碑は壊されずに残っている。記念碑には「ドイツ・ファシスト侵略者とソ連邦の自由と独立のために闘って尊い命を犠牲にした英雄たちに栄光あれ」とキリル文字で掘られた文言がある。

しかし、チュイコフやナチと闘い、記念碑が捧げられた英雄たちが墓の中で安らかに眠れないように、事態が一変した..ファシズムが再びその醜悪な姿を現したのだ。今度はドイツではなく、ステパン・バンデーラとその一味のネオ・ナチ超国家主義的イデオロギーに動かされたウクライナ政府の中に現れた。

ナチ・ドイツに味方したバンデーラー一味は第二次世界大戦後の10年間にソ連軍によって物理的に退治されたはずだった。しかし、そのイデオロギーはウクライナ西部で生き残っ

た残党が維持し、さらに西ドイツへ逃れて、勢力を温存した（バンデーラ自身も西ドイツに定住、1956年にソ連 KGB に殺害された）。カナダではバンデーラ・プロパガンディストだった出版社社長の孫娘のクリティア・フリーランドがカナダ副首相になっており、米国ではステパン・バンデーラ崇拝者たちがニューヨークのエレンビル郊外に、バンデーラと他のネオ・ナチ・ウクライナ超国家主義者たちの鏡像を立てた「英雄たちの公園」を造った。

1939年ドイツ軍がポーランドに侵攻、それに対抗してソ連軍が東から迎え撃ち、ポーランドが東西に分割され、ソ連はウクライナ西部地区を併合したが、そのウクライナ西部ではナチ・イデオロギーは一掃されずに、執拗な影のように残っていた。

CIA 資金援助の地下組織

1956年初めから、(フルフチョフが共産黨員への秘密演説をして開始した非スターリン化政策を受けて)、ソ連当局によって逮捕され有罪とされていたウクライナ蜂起軍(UPA)と超国家主義的テロ集団ウクライナ民族主義者—バンデーラ(OUN—B)のメンバー数千人がグラグ(スターリン政権下に作られた矯正労働収容所)から釈放され、ソ連邦社会に再統合するという約束で故郷へ帰された。しかし、再統合はまったくなかった

それどころか、彼らは CIA から資金援助を受けて政治的地下組織として活動、破壊工作を行い、ウクライナ民族主義イデオロギーを唱え、反ソビエト・反ロシア・イデオロギーをばら撒いた。

ソ連邦が崩壊した1991年末になると、これら極右的ウクライナ民族主義勢力は表面へ出てきて、政党を結成し始めた。彼らを支えたのはステパン・バンデーラをカルト的に崇拜し、それを物理的強迫によって広める暴力的過激集団であった。

スヴォボダとして知られる超国家主義的政党全ウクライナ連合「自由」や極右政治団体右派センターが誕生した。彼らはウクライナ人民の支持を得られなかったが、2014年2月、マイダン広場から始まったクーデターで大きな役割を果たした。民主主義的な選挙で選ばれたヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領を追放し、米国が選ぶ人物に政権交替させたクーデターで、アルセニー・ヤツェニウクが首相となった。

クーデターの数日前に米国務次官のビクトリア・ヌーランドと駐ウクライナ米国大使のジェフリー・パイアットの間で交わされた電話が盗聴された。それによると、ヌーランドは新しいウクライナ指導者にヤツェニウクを据えるところを提起し、ヤツェニウクにスヴォボダの指導者オレフ・チャクニボクに協力させるようにせよと大使に指示した。ヤツェニウクは右派センターの民兵からも支持されていた。

クーデター新政府とバンデーラを狂信的に崇めるスヴォボダと右派センターは密接な協力関係にあり、ネオ・ナチはとりわけウクライナの治安や安全保障分野で大きな役割を担うようになった。例えば、右派セクターの元代表のドミトリ・ヤロシはウクライナ国防軍司令官ヴァレリー・ザルジヌイ將軍の顧問となった。顧問となった彼はその役職を使って右派セ

ンターの暴れ者を多数ウクライナ正規軍に編入した。

この再編で生まれた部隊の一つが第67機械化旅団である。この旅団は2022年11月英国で軍事訓練を受けた。英国だけでなく、NATO加盟国はウクライナに兵器提供だけでなく、ネオ・ナチの軍事訓練を行っているのは周知の事実である。2022年7月に英国の国防省は、4カ月単位でウクライナ人10000万人づつを軍事訓練すると発表した。

NATOが狂信的ネオ・ナチを軍事訓練している事実を、西側メディアは意図的に報道を控えているように見える。

ウクライナ防衛コンタクト・グループ（防衛支援調整会合）

しかし、事は単に数千人のステパン・バンデーラの憎悪イデオロギーを信奉する人々に軍事訓練を施す以上にもっと複雑 — それに問題が多い — である。第8回ウクライナ防衛コンタクト・グループの会合で数十億ドルの軍事支援が承認されたが、その対象となる旅団規模の部隊が三つあり、前述した第67器械化旅団はその一つになりそうである。最初の防衛コンタクト・グループ会合は2022年4月にドイツにあるやけに広いラムシュタイン米空軍基地で開かれ、以来コンタクト・グループはウクライナ軍に対する訓練や兵器支援に関するNATOとウクライナ軍の間の調整機構の役割を果たしている。

一番最近のラムシュタイン会議（第8回ウクライナ防衛コンタクト・グループ会合）は2023年1月に行われたが、その前の2022年12月にウクライナ国防軍司令官ヴァレリー・ザルジヌイ将軍に対する『エコノミスト』のインタビューの方が注目を集めたので、影が薄くなった。ザルジヌイによれば、第一に優先されるべき重要な課題は「ソレダール-バフムート戦線を死守し、これ以上ロシアに奪われないこと」だ。しかし、このインタビューの後、ソレダールはロシア軍に取られ、バフムートはロシア軍に包囲された。そのうえ、ロシア軍はバフムート戦線の北と南から攻勢に出て、場合によっては一日の7キロメートルも進軍した。

ザルジヌイ将軍は第二に優先されるべき重要なこととして、この2月からウクライナ軍をフレッシュアップすることを訴えた。「兵と武器をフレッシュアップしなければならない。わが軍は現在戦闘で身動きが取れない。みんな血を流している。ただ勇気と英雄的士気と、指揮官たちの優れた指導力だけで踏ん張っている。新たに武器と訓練で士気を刷新して、2月に大攻勢をかけたい」と言った。「いろいろと検討した。必要な戦車の数、大砲の数、その他どういう武器が、2月大攻勢に集中するために必要かを計算した。塹壕で頑張っている兵士には気の毒だが、今必要なのは、この戦争は来年まで続き、ますます激しくなるだろうから、それに対応できる資源、つまり兵器をもっともっと集めることだ。」

ザルジヌイ将軍は、2月大攻勢の目標はロシアを2022年2月23日の地点、侵攻前の位置にまで追い返し、クリミアを奪回することだ、と述べた。「クリミアの境まで進撃するためにはメリトポリ（ドネツク人民共和国の南にある戦略的な都市）まで84km進撃しな

ければならない。メリトポリを確保できれば十分だ。陸路を完全に支配できるし、そこからクリミア地域へ思う存分攻撃できるからだ。」と言った。

彼は自信満々に「敵は粉碎できる」と豪語し、「必要なのは戦闘資源だ。戦車300台、IFV（歩兵戦闘車）600～700車、榴弾砲500台増やしてもらえればロシア軍を追い返すことができる」と語った。彼は近く米軍統合参謀本部議長マーク・ミリーと会談する予定だと述べ、「ミリー氏に戦闘資源の供与の重大さを話すつもりだ。もし支援を獲得できなくても、もちろん我々は徹底的に闘うが、しかしある映画の主人公が言ったように、結果は保障できない。結果は予見しにくいものではない。これがわれわれのやるべきことなのだ。」と言った。

要するに、自分が要求する軍需品をくれればロシアに勝てるが、くれなければ負ける、と言っているのだ。

第8回ウクライナ防衛コンタクト・グループ会合

ラムシュタイン第8回ウクライナ防衛コンタクト・グループ会合は1月20日に開かれ、ウクライナは西側諸国にザルジヌイが要求する武器援助を迫った。50カ国以上の国の防衛大臣が参加した。ウクライナの防衛大臣オレクシー・レズニコフはこの会議の数日前に開かれたダボス世界経済フォーラムで、「我々は今 NATO のミッションを遂行している。NATO は血を流していないが、我々は血を流している。せめてこちらが要求する兵器を与えてくれ」と演説したことを報告した。

コンタクト・グループはウクライナの武器要求を検討し、数十億ドル相当の武器援助をすることを決定した。防空兵器、火砲弾薬、軍用車両、そしてウクライナが要求する榴弾砲500台のうち240台。240台の内訳は、米国製 M-2 ブラッドリー戦闘車一個大隊分（59台）、M-1126 ストライカー装甲車2個大隊分（90台）、ドイツ製マルダー歩兵戦闘車1個大隊分（40台）、スウェーデン製 CV90 戦闘車両1個大隊分（50台）であった。

ラムシュタイン会合はさらに4大隊分の自走砲を供与する約束をした。その内訳は、スウェーデン製アーチャー砲兵システム19台、英国製 AS-90 自走砲18台、米国製 M-109 自走榴弾砲18台、フランス製シーザー自走榴弾砲12台であった。すでにウクライナに約束したけん引き式榴弾砲 FH70 の24台と合わせた合計は100台となるが、これはザルジヌイが要求した500台とは程遠い数である。

戦車についてもザルジヌイは300台要求したが、西側の戦車供与はその数に程遠く、せいぜい英国がチャレンジャー2主力戦車を中隊規模（14台）供給すると約束したぐらいである。

ザルジヌイは『エコノミスト』のインタビューで、3機甲旅団と3機械化旅団規模の装備がないと自分が計画する攻勢は出来ないと行った。西側が約束したのは2旅団規模の武器

¹ 日本も参加した。

であった。すでに1旅団が形成されて現在ポーランドで訓練中のものと合わせても、サルジヌイが計画する対ロシア攻勢に必要な戦力の半分にしかならなかった。

米国のミリー将軍は装備不足でなく訓練の不足が問題だと考えていた。彼はラムシュタイン会合に参加する前にドイツのグラーフエンヴォーア練兵場を視察した。そこでは米軍がウクライナ兵600人を、中隊又は大隊規模の大砲、装甲車、歩兵部隊による戦闘で、組織的に完全統合した行動ができるよう訓練していた。ミリーは、ウクライナがロシアに取られた領土を奪い返すためにはこのような訓練が必要だと、取材メディアに語った。与えた兵器をきちんと使いこなせるようにする訓練が必要だと言った。「春の雨期が始まるまで兵器を使いこなせるようになるのが理想的だ。」と言った。

西側が供給する兵器

いくら上手に訓練を指導しても、いくら熱心に訓練から学んだとしても、訓練と実戦とは異なる。実戦では、兵器や装備が1カ月もすれば機能不全になることが多い。敵の攻撃で損傷を受けるのはなく、メンテナンス不足で故障するのだ。例えば、米国製 M-2 ブラッドリー戦闘車だが、ウクライナ兵が使うネット通信『レディット』には、兵士たちがそのメンテナンスを悪夢のようだという文句が多い。

「ブラッドリーのメンテナンスがいかにひどいものであるか、同情する気にもなれない。」イラクでブラッドリー部隊に所属した自称米軍退役軍人は『レディット』への投稿でこのように断言した。「特に故障していないときでも（実際には故障がよく起きる）、砲塔の軌道を変えるのに熟練した乗組員二人がかりで3～4時間もかかることがあったりする。無限軌道調節装置、発砲衝撃吸収装置、車輪、スプロケットを絶えずメンテナンスし、必要に応じて部品を取り換えなければならない。エンジンの点検でも、エンジンの蓋をあけて見るだけでは収まらず、装甲版を外し、レッカー車のクレーンでエンジンを車体から取り出さなければならない。」

ストライカーもブラッドリーに劣らずメンテナンスが困難なシステムである。『レスポンスブル・ステイトクラフト』誌の最近の記事によると、イラクとアフガニスタンの両方でこの車両を使用した米軍兵士は、ストライカーを「道路を走行し、雨が降っていない限り、そして戦う必要がない限り、非常に優れた戦闘車両だ」と呼んだそうだ。ストライカーで絶えず注意をしなければならないのは「高さ管理システム」（HMS）である。簡単に言えば、兵器本体が車両のタイヤに巻き込まれないようにすることである。HMSを絶えず監視しメンテナンスしなければ、本体とタイヤが接触して故障し、全体が機能しなくなる。HMSは複雑なシステムで、一部分が不完全だとストライカー全体が機能しなくなる。戦闘現場でウクライナ兵が正しく使えるようになる見込みは、ほぼゼロに等しい — それは訓練不足だけでなく、兵站的支援（例えばスペア部品の調達）がないからだ。

ドイツ製のマルダー I F Vもウクライナ軍にとってメンテナンスの頭痛の種であったよ

うだ。『ザ・ナショナル・インタレスト』の2021年記事は「この装甲車は最初から当てにならないと見られていた。無限軌道がすぐに消耗するし、トランスミッションもよく故障し、それを修繕するにはエンジンを車体から外さなければならないが、戦場ではそんな余裕はない」と書いていた。

ドイツは多額のカネを投資してマルダーの改良を試みているが、早急な改良は望めない。ウクライナに提供されているのは問題を抱えた旧式マルダーである。それに伴うメンテナンスの問題は、ウクライナには適切に対処する用意がない。

スウェーデン製CV90はノルウェー軍がアフガニスタンで使ったので、実戦経験がある。この兵器システムに関するメンテナンスの問題は発表されたことがないので、不明である。仮にメンテナンスが容易なシステムだとしても、ブラッドリー、ストライカー、マルダーとは異なる独自の問題点があるかもしれない。

要するに、NATOからもらう5大隊分に相当する歩兵戦闘車両をきちんと使いこなすために、ウクライナ軍は、それぞれ独自の問題を抱えた4種のまったく異なるシステムを、兵站不足と部品欠如という状況の中で、メンテナンスを担当する整備部隊を訓練して育てる必要があるのだ。せっかくラムシュタイン会合でウクライナに重機火器支援を決めても、この兵站的悪夢がアキレス腱になりそうである。

NATOもウクライナも木を見て森が見えないようである。現状の兵器供給レベルと兵站的欠陥ではウクライナのロシア軍への大規模な攻勢には不十分であることを認識しないで、両者は戦車のことばかりを問題にした。特にドイツが自国製の新世代兵器であるレオパルト2戦車のウクライナ供与に二の足を踏んでいることが問題になった²。

ドイツの近代史と世論

ドイツのウクライナへの戦車供与に関しては世論の反対についての議会での懸念があることが、ラムシュタイン会合でドイツが煮え切らない態度を取った原因である。この懸念を的確に表現したのは右翼政党「ドイツのための選択肢」のペトル・ビストロンであった。彼は「ドイツ戦車がウクライナでロシアと闘うのはあの悲劇の繰り返しだ」と同僚議員に言った。「我々の祖父がウクライナの民族主義者のメルニックやバンデーラの一味の協力でソ連軍と闘った歴史を思い起こしてほしい。あの戦争でロシアとドイツは数百万人の犠牲を出し、結局ソ連軍がベルリンを陥落させて、ドイツの敗戦となった。あのときの記念として今もソ連軍の戦車二台がティーアガルテンの記念館で常設展示されている。諸君は毎朝その前を通っているのだ」と演説した。

レオパルト2戦車のウクライナ供与問題は技術的というより政治的であった。ポーラン

² このときドイツはレオパルト2戦車のウクライナへの供与を先延ばしにしたが、結局、圧力に負け、供与を決定し、他国（主としてポーランド）がそれをウクライナに供与することも許可した。

ドがドイツの躊躇いを無視して、ポーランドは自国にあるレオパルト 2 戦車を 14 台ウクライナに送るつもりだと脅迫したのである。英国が供与を約束したチャレンジャー 2 戦車 14 台と合わせると、ウクライナはザルジヌイ将軍がロシアへの新攻勢のために要求した戦車 300 台のうち 28 台を確保したことになる（現在は、米国が供与するエイブラムズ主力戦車が 58 台）。

要求と供与の数の差とメンテナンス問題を別にすれば、NATO 政治家はラムシュタイン会合の成果に満足している様子である。英国のベン・ウォレス国防長官が議会で「国際社会は、ロシア軍をウクライナから追い出すための新攻勢に兵器支援することは、ウクライナ防衛のための兵器支援と同じくらい重要であることを理解している。受け身の抵抗から攻勢へと転じるための兵器支援だ」と演説した。ウォレスは、新攻勢は、もし成功すれば、ロシア軍をロシア連邦領から追い出す（ウクライナ領だったがロシア語話者が多くて差別弾圧してきたルハンスク、ドネツク、ザポリージャ、ヘルソンの 4 州で、今はロシアに併合されている）こと、つまりロシア本土への攻撃と見做されると、ロシアの核兵器使用ドクトリンによって、核戦争の可能性への道を拓くことになることを、まったく考慮していない。前々からロシアが核兵器使用ドクトリンとして、通常兵器によるロシア攻撃が圧倒的でロシア国の存続を脅かすときは核兵器の使用も辞さないと言言していた。

コンタクト・グループ会合が終わったとき、ロシア政府のスポークスパーソンのドミトリー・ペスコフは記者会見で「これは潜在的に極めて危険である。この争いをまったく新しい次元へと発展させる可能性がある。世界とヨーロッパ全体にとって、安全保障の観点から見て、悪い前触れとなるかもしれない」と言った。

ロシア政府高官たちも SMS で同じ趣旨のことを発信している。アナトリー・アントノフ駐米ロシア大使は自分のテレグラム・チャンネルで次のように述べた。

誰も目にも明らかなように、我々は、米国だろうが NATO だろうが、ゼレンスキー政権に供与する如何なる兵器も破壊する。これは大祖国戦争³のときも同じだった。ナチの戦車が元ソ連邦の地に出現したら、ウクライナのネオ・ナチ政権の転覆へと戦争目的を変えるであろう。この地域の人々がかつてのように平和で仲良く暮らせる通常の状態へ戻すように全力集中するであろう。

元大統領で現大統領プーチンの側近であるドミトリー・メドベージェフはツイッターで、ロシアを破壊しようとする行為は人類の存在への脅威をもたらす冒険だと書いた。「核を持つ国を通常兵器で破壊することは核戦争を招くことになることを理解していないようだ。ロシアに限らず核を持つ大国は、自らの運命を左右する大きな紛争で敗北したことはこれまでなかった。」

³ 主としてソ連とナチドイツとの戦争を指す。

ウクライナへの結果

ラムシュタインのコンタクト・グループの決定がもたらす影響はロシアよりはウクライナにとってより大きな害となる。西側の圧力でロシア軍を昨年に取り戻された領土から追い出す新攻勢を計画したザルジヌイ将軍は、残り僅かな予備役を全員動員して打って出るつもりだが、去年の9月や10月に闘ったロシア軍とは異なるロシアに直面し実のない攻撃を行わざるをえないことになるだろう。去年の戦争では、NATOからの数百億ドルの武器援助と、訓練と、戦略的指導によってハルキウやヘルソンなどを占領して限界以上に拡大したロシア軍の乱れを突くことができた。

しかし、現在のロシア軍は昨年秋のロシア軍とは異なっている。30万人の予備役を招集したロシア軍はウクライナ東部の戦線を固めて防衛体制を引いているだけでなく、8万人の兵力を集結させてドネツク地方で攻勢に出る力と、ヘルソンとハンスクを防衛維持できる力を蓄えている。

去年の2月24日から秋にかけての戦闘は、ロシア軍は軍事行動の基本からかなり逸脱したやり方で戦争遂行を行った。しかし、今やロシア軍は定石どおりに戦争遂行するようになった。今やロシア軍は前線における兵力の数や配置を整え（昨年秋のハリコフ攻防戦では不備だった）、後方から弾丸など火力支援（昨年秋はこの点の不備だった）も万全の体制にして、NATO兵器の一斉攻撃に対処できるようにしている。

一方ウクライナ側は、ザルジヌイ将軍も認めるように、戦力が十分ではない。コンタクト・グループが約束した兵器が3旅団規模で一点集中できたとしても、2万人規模の兵力で軍事ドクトリン通りに展開しているロシア軍の防衛ラインを突破することは困難だろう。

ウクライナとNATOはペトル・ビストロンがドイツ議会で言ったこと — ドイツ戦車とロシア戦車が闘った歴史の教訓 — に注意を向けるべきである。ウクライナ国内でロシア戦車に対してドイツ戦車は歴史的にうまくいっていない。ベン・ウォレスもマーク・ミラーもロシア軍の刷新した兵力展開、特にドネツク地域の戦略拠点バクムットにもっと注意を払うべきである。スターリングラードやベルリンの対ナチ戦闘でヴァシリー・チュイコフ指揮の第8親衛軍の兵士たちと同じように、戦場でファシズムの勢力を破壊する態勢をとっている。ドイツ戦車に対してロシア兵は特別な思いで闘うだろう。そういう歴史を自覚している兵士は手ごわい。

これは、何よりもラムシュタイン効果の真の表現であり、NATO政治家はそういう面も理解すべきである。NATO政治家とゼレンスキー政権の思い上がりとは無知は、数十万のウクライナ兵士の命を犠牲するのだ。